
華街の占者

咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

華街の占者

【Nコード】

N6312Q

【作者名】

咲

【あらすじ】

逃げ切ったはずの過去。それは一人の男との再会により、再び囚われることに―― R15はとりあえずです。

華街の占者

新興国の一つ、滝国^{そう}。

若き王が興した国である、滝国の外れにある華街^{かすみ}『霞』には一人の占者がいるという。

その占者は失せモノを見つけてくれる——そう。物であっても者であっても。

ときには先の相を視ることもあるという。

その噂を聞いて、訪ねてくる人間は後を絶たない。

けれども、その占者に会うことは叶わない。

その存在を疑っても街の華達は揃って占者は存在すると云う。

——何故ならば、占者は華達^{はな}だけにその力を見せているのだから…

華街には必ず花の名が入っている。辺境の『霞』であっても、その因習^{うつつ}は変わらない。

現の世とは一線^{うつつ}を画した、この街の昼はどこか他と違っている。夜になれば、浮世と化す街は、昼の時間とあってはどこか沈んでいるかのよう。

その街の人気の少ない通りを一人の少年が歩いていた。
立ち並ぶ建物の一つから女が飛び出てきた。

「——^{しい} 椎！ちょうどよかった！^{あね} 姐さんが視てほしって言うてるんだけど、今いいかい？」
「いま、用事を頼まれてるところだから、その後なら大丈夫だよ」
「いつぐらいになる？」
「一刻後には行けると思うよ」
「分かった！姐さんにはそう伝えておくよ。よろしくね」
「うん。じゃあ、また後で」

少年—— 椎はふわりと笑い、その場を後にした。

椎がこの辺境の華街に流れ着いたのは一年前。
ある日、突然現れた椎を拾ってくれたのは、一人の妓女だった。
『華』と揶揄される妓女たちの世界で暮らすようになり、しばらく経ってから恩返しの意味で妓女たちを占うようになった。
よく当たると評判になり、噂を聞いてやってくる人間が出始めたが、椎は妓女以外を視ることはなかった。
占いも客が来る前、昼に行っている。
これ以上、噂が広がるのは避けたいところでもあった。

約束していた、占いを終えて店を出ると外はすでに陽が沈む頃になっていた。

ちらほらと客が姿を見せ始める頃。
普段であれば、とつくに家に戻っている時間でもあった。

「早く帰らないと…」

少しばかり焦りの色を滲^{にじ}ませて足早に店を立ち去る。

街の外れ、あと少しで我が家というところまで来たとき、背後から聞き覚えのある美声がした。

「みつけた」

その声はこの場所では聞くはずのない声のはずだった。

恐る恐る振り返り、声の主の姿を確認すると、逃げ切ったはずの、ココにいるはずのない人物が立っていた。

椎は恐怖で顔を蒼白にした。

「やっと、みつけた」

彼は口元に笑みを浮かべながら、椎に近づく。

金縛りにあったかのように、動かせずにいる椎を腕に抱きこみ、

「——迎えに来たよ、椎」

——さあ、帰ろう？

2人の足元に光る陣が浮かび、2人は『霞』から消えうせた。

華街の占者（2）

滝国の若き王、露は執務室で膨大の書類に埋もれながら日々の職務に追われていた。

そんな中、一つの知らせが彼の下にやってきた。

——将軍が帰還された。

侍従からもたらされた知らせに、仕事の手を止める。

「へえ、ようやく帰ってきたか。それで？あの子も一緒か？」

彼が長い休暇を取ったのは半年前のこと。

本当であれば、あの子がいなくなった時にすぐにでも捜しに行きたかったのだろう。

けれども、彼の立場では難しい話でもあった。

帰ってきたということは、あの子を見つけたのだろう。

でなければ、帰ってくるはずがない。

そう分かった上で、侍従に確認をとる。

「はい。椎さまもお戻りになりました」

返ってきた返事は思ったとおりの言葉だった。

「——そう。捕まっちゃったんだね、椎……」

逃げ出した、小鳥は籠の中――

ようやく取り戻した。

彼は、その事実に歓喜した。

椎は今、自分の腕の中にいる。

半年振りに戻った、己の部屋に入り、意識を失った椎を寝台の上を下ろす。

椎の短い黒髪がシーツに散る。

彼は寝台に腰掛け、椎の黒髪を撫でた。悪戯な手は、髪だけに止まらず、椎の頬、唇へと触れる。

その感触をもって、今、此処に椎がいることを実感していた。

「――髪、切っちゃったんだね……」

記憶にある、彼女の髪は腰の辺りまで伸びていた。しかし、今は肩よりも短くなっていた。

自分から逃げるために、切ったのだろう。そのことに苛つく。

けれども。

見つけ出した。
掴まえた。

だからこそ。

「もう、逃がさないよ…椎」

彼——滝国將軍、瀬^{らい}は少女を見下ろし、呟いた。

華街の占者（3）

すこし昔、この大陸は戦国時代といつていい状況であった。

五十年ほど前、大陸を統一していた大国が斃れ、そこからいくつもの小国が乱立し、戦国の世となった。

続くと思われた戦国の世は十年ほど前、ある国が興ることによって、とりあえず収束することになる。

現在、大陸には大小、六つの国がある。

十年前に興った国は今では大陸一の大国と称されている。

その国の名は滝国。

当時、十七才の若き王『露』はその溢れる才をもって国を興し、大国へと押し上げた。

彼の下には多くの才能ある若者たちが集い、国を強くしていった。その中でも、他国から恐れられた男がいた。

滝国將軍『瀨』。

彼の圧倒的な力の前では何もかもが無力であった。今の世となつては操り手が少なくなつた『天恵』を持つていただけでなく、彼の武術、策謀すべてが他を圧倒していた。

戦国の末には『滝王の抜き刀』とも呼ばれていた。

他国に知り渡り、恐れられていた『滝王の抜き刀』。

それとは別に定かではないが密やかに囁かれた『懐刀』の存在があった。

けして、戦場に出ることはない存在。

彼の者は『天恵』を持つのだという。

過去を、今を、時には先を視るチカラを持つて、戦を制するのだと。
ただでさえ、操り手の少ない『天恵』の中でも類稀たぐいまれなそのチカラ。

その操り手は当時、まだ七つにも満たない幼子であつた。

華街の占者（4）

一番、古い記憶は檻の中の世界だった。

暗い、光の届かない場所で『視^み』続けていた。

過去を、今を、先を。

^{こいねが}希われるままに、その望みを視た。

視なければ、何をされるかわからなかったから。その恐怖から逃れるために視た。

けれど、その世界は突然終わった。
終わらせたのは二人のオトコの人。

一人は黒灰色の髪に金の目をした人。
もう一人は白金色の髪に紅い目をした人。

彼らは私に世界を見せてくれた。

彼らは私にとっての絶対のヒト。

彼らに逢って、はじめて私は『椎』になれたから。

だから付いて行くことを決めた。
少しでも役に立てるなら。

彼らのために出来ることを——そう、思った。

それがどんなに罪深いことだったのか、当時の私は分かっていなかったけど…

—

長い眠りから目が覚め、椎はゆっくり身体をおこした。
その時、右の足首に違和感を感じた。視線をやると、そこには繊細な細工の施されたアンクレットがあった。

「——なに、これ——」

そして、気を失う前の光景が頭を過ぎった。

「そうだ…」

みつかってしまった。
彼につかまってしまった？

「どうして…」

どうして、私をさがすの？

わたしはもう必要ないのでしょ…う？

だって、わたしにはもう、確かな未来を視る力はないのだから。
もう、彼らの役に立てない。

そう思って、離れたのに。

なのに、どうして？

——どうして、連れ戻したりするの？

椎の目から涙が一滴零れた——

華街の占者（5）（前書き）

別名、王様から見た2人。

華街の占者（5）

育った場所は『天恵』をもつ子供を攫い、教育する施設だった。戦乱の世、『天恵』は財産であり、戦争の道具ともいべき存在^{もの}だったのだ。

その場所には今では相方ともいえる瀬もいた。

二人が戦に初めて出たのは十二のとき。それからは戦いの毎日といってよかった。

ただ、国のために戦い、滅ぼす日々。

そんな毎日をいつしか疑問に思うようになった。

賛同するやつも多くいた。

少しずつ仲間を集い、国を興し、自分たちを育てた国を斃した。

国を落とした、その日。

見つけたのは一人の女の子。

小さな女の子が隠されるように、閉じ込められていたのは忘れられた地下牢だった。

檻の向こうに、その子を見つけたとき怒りに頭が白くなった。

——こんな幼子を使ってまで、国を守ろうとしたのか？

その子は稀な『天恵』を持っていた。

身体のうちこちには傷や痣があり、その目は諦めと怯えしか映していない。

怒りで動けないでいると、後ろに控えていた瀬が前に出て、牢の扉を『チカラ』で壊した。

瀬は牢の中に入り、女の子の前でひざを付いた。

怯える、その子に笑いかけた。

そのことに状況を忘れて、啞然とした。

正直なところ、人を嘲笑うような嗤いしか見たことがない。その子に向ける笑みは、真逆の優しいもの。

呆然としている俺をよそに、状況は様変わりしていく。

瀬は女の子を抱き上げ、牢を出る。

「——何を突っ立っている」

瀬のいつも冷たい視線が突き刺さった。

「早く、ここから出るぞ」

「ああ……」

言うなり、自分の横を通り過ぎ地下から出て行く。

俺は少し遅れて二人の後を追った。

物心が付いた頃から、あの場所にいたという女の子には名前がなかった。

少女に請われ、『椎』という名を贈った。

まだ六つと幼いこともあり、椎は信頼が置ける孤児院に預けるつもりだった。

しかし、椎自身がそれを嫌がった。

そして、瀬が少女の願いを聞き入れてしまった。

椎の持つ『天恵』を惜しむ声も確かにあったのも事実。

結局、椎は軍に入ることとなった。

世に不慣れな椎の隣には常に瀬が寄り添うように付くようになっていた。

——— 今、思えば最初から瀬はあの子に囚われていたのだろう。

華街の占者（5）（後書き）

ちなみに、彼らは当時十七歳。普通に考えてロリコンじゃね？とも
思います。

華街の占者（6）

「——おかえり、椎」

呆然と寝台に座り込んでいた椎は涙が滲む顔を声の方へと向けた。

そこには滝国王、露が立っていた。

王は涙を零す椎に歩み寄り、

「おかえり」

椎の頭を撫でながら、その言葉を繰り返した。

「——露…さま」

何故、どうして。

聞きたいことはたくさんあるのに言葉にして出すことは出来なかった。

ただ、このコトだけは聞いておかなくてはと思った。

「瀬さまは…？」

私をココに連れ戻したヒト。

私がココを離れたかった理由。

その理由をこの人は知っているはずなのに。

連れ戻されることが分かっていたなら、どうしてあの日、私を行か

せたのだろっ…

「瀬は溜まった仕事を捌いているところ。半年分だし、しばらくは忙しいだろうね」

王は苦笑いを浮かべて、問いに答えた。

「ちなみに此处は瀬の自室だよ」

続けて、聞かされた事実には言葉が失う。

「そして、そのアンクレットは君をこの城へ繋ぎ止めるもの」
「…」

椎は絶望に顔色を青褪める。

「瀬はもう、君を放すつもりはないみたいだ」

露は今にも倒れそうな様子の椎を見つめながら、一年前のことを思い出す。

あの日、この子を黙って見送ったのは、これ以上やつの傍にいたら壊れそうだったから。

あのままにしていたら、間違いなく、椎は心を壊していた。

そう判断して、椎を行かせた。瀬が椎を探しに行くのを遅らせた。

正直、瀬が椎を半年で見つけるとは思わなかった。

椎の様子を見ていると早かったようだ。

まだ、椎の心は脆いように思う。

でも、つかまっていたのならば。

2人にとって最善の結果に収まればいい。

ただ、それだけを願った。

華街の占者（7）

未来を視るチカラ。

その力に異変が出始めたのは3年ほど前からだった。

正確には出始めたのではなく、『気付いたのは』だろう。かつて、明瞭に視えた未来。自分が望んだ通りに視ることができた。

それが今では視えたとしても曖昧で不確かなもの。

過去や今を視る力はそのままで、どうしてもか未来を視る力だけが衰えた。

きつと、罰が当たったんだと思った。

この力で沢山の命を奪ってきた。

直接、人を殺めたことはないにせよ、この力が戦において重要な意味を持つことは分かりきったこと。本来であれば、未来を違^{たが}えることは許されない。

それでも、この国のために、あの二人のために未来を変えることに躊躇^{ためら}いはなかった。

——罪深いと分かっているにも、未来を視ることをやめなかった。できなかった。

でも、そのことが彼を傷つけることになるなんて思ってもみなかった。

——はじめて、この力を憎いと思った。もう、彼の傍にいけない……そう、思った。

だから、彼から逃げた。

すべてを置いて。何もかも捨ててきた。

私の代わりに傷つき、昏睡する彼のそばにいるのが辛くて、耐えられなかった。

本当はただ、それだけだったのだ。

すべての始まりは、一年半前。

隣国から来た姫君が城に滞在したことから始まった。

「——あなたが、露王の『懐刀』？」

姫君への歓迎の宴の席、麗しの姫君は椎を見ながら聞いてきた。
姫君の態度はなにやら友好的ではないような気がした。

その目が、声が、自分を快く思っていないことを顕^{あらわ}にしていた。

——もうすこし、隠したほうがいいんじゃないでしょうか？

そんなことを思いつつ、どう返事をしたらよいか迷う。
『懐刀』。その存在は公とはされていないこと。

たとえ、戦が終わった今においても、それは変わらない。

その秘め事について、答えることはできないし、したくない。
そう思い、

「なんのことでしょう？」

淡い笑みを浮かべながら、否定した。

その椎の返答に、姫君は意外そうに目を見開いた。

「ちゃんと笑えるのね。」

「はい？」

小さく呟いた言葉を聞き取れず、首を傾げる。

姫君は今まで浮かべていた表情——不機嫌そうな顔を止め、鮮やかに微笑んだ。

「改めて、茜国第三王女の杏よ。よろしく」

——その笑みはとっても魅力的で、思わず見惚れてしまうほどでした。

「あなたの名前を聞いてもいいかしら？」

「あ……椎と申します、王女様」

「……」

姫君は眉を顰めた。
なにか、失礼なことを言ったのだろうか。内心慌てながら、姫君を伺う。

「杏って呼んで」

「え…っと、杏さま？」

「ええ。滞在の間よろしくね、椎」

杏は嬉しそうに笑う。

その様子に椎もつられて微笑み、

「はい。よろしくお願いいたします、杏さま」

言葉を返した。

今、思えば。

その出会いは必然。

そして、すべての始まり。

この国と、隣国を巻き込む『出来事』への序奏だったのだ。

華街の占者（7）（後書き）

過去編突入です。

華街の占者（8）

「…瀬。少しは機嫌直してくれないかな？」

——なぜ、主君のはずの俺が頼んでいるのか。

内心では疑問に思いつつ、滝国の露王は執務室で冷気を漂わしている男に声をかけた。

常であれば、彼の傍にあるはずの少女の姿はない。

そのことが彼——瀬の機嫌を損ねている。

正直、仕事がやりにくい。

ぶっちゃけ、どうにかしてくださいと嘆願書まで王の下に来ている始末。

「…」

——無視かよ。

露は無視を突き通す瀬を呆れ半分に見ながら、此処にいない少女——

——椎のことを考えていた。

椎は普段ならば、露の侍女をしている。

露の侍女のはずなのだが、ほとんど瀬の世話ばかりをしているのはご愛嬌だろう。正確には瀬がそうするように仕向けているのだが。

椎が数日前からある人の下へ出向しているのが、瀬の不機嫌の原因であった。

その先というのが、今、この城に滞在している茜国の王女『杏』。

王女は椎を気に入った様子で、椎を世話役に指名したのだった。そのため、椎は瀬の傍にいないわけなのだが…

——いいかげん、納得しろよ。

しかも、椎にはその素振りも見せない。
そのため、瀬の八つ当たりの被害を被^ひるのは瀬の部下と王、時々その他諸々^{もろもろ}。

「——椎も楽しそうにしているんだし、それに時々顔を見せに来ているだろう？」

——バキッ

瀬の筆が折れた。

何かの琴線に触れたらしい。どんだけ、心が狭いんだ。
瀬はゆらりと席を立ち、扉へと向かう。

「左手の剣を持って、何処行くんだ？」

瀬の背中に問い質し、瀬はゆっくりと振り返った。
その顔は不機嫌を通り越し、目に殺気を宿していた。あまりの形相に背筋に冷や汗が流れた。

「——訓練場」

行き先のみを答え、瀬は執務室を出て行った。
残された露は崩れるように椅子に寄り掛かり、

「今日の被害者は何番隊か…」

今日の被害とやってくるであろう、苦情、嘆願書を思いため息をついた。

華街の占者（9）

—— いらいらする。

訓練場は将軍が姿を現したことで、一転、ピリピリとした空気に包まれた。

稽古と言いながらも、圧倒的な強さで次々と隊員を瞬殺し、最後の一人が力尽きると訓練場は死屍累々の山と化していた。瀬は周りを一瞥するが、隊員たちは起き上がる事さえできない始末。

内心、舌打ちをした。

苛立ちは紛れていない。稽古と銘打った八つ当たりは、苛立ちを払拭するには不十分で。

しかし、その八つ当たり先の隊員たちは力尽き、この苛立ちをぶつけることはできなかった。

—— 不甲斐ない。

それは隊員たちに向けられた言葉か、それとも自分自身への言葉なのか。はたまた、両方か。

瀬自身にも、その答えは分からなかった。

どちらにせよ、隊員たちの鍛錬が足りていないことは事実。

「—— 休憩後、また稽古をつけてやる。—— 逃げるなよ」

瀬はそう言い残し、訓練場を後にした。

その言葉に訓練場の空気はさらに重たくなった。

「瀬さま？」

王の執務室に向かう途中。

この最近、姿を見ることがなかった人に逢った。彼女は、ワゴンを押しながら近づいてきた。

「こんにちは」

数日ぶりの椎の笑みは破壊力抜群だった。

——数日間、この笑みが野放しになっていたわけか…

若干、黒いオーラが漂いつつも、椎には悟られないように笑みで誤魔化す。

「ああ。お茶会の準備？」

ワゴンにはティーポットにティーカップのセット、お菓子が用意されていた。

「はい。中庭で行うのでその準備を。瀬さまはお仕事の途中ですか？」

「いや…今は休憩中」

本当は露に八つ当たりでもしようと思ひ、執務室に向かっていたのだが、このチャンスを逃すわけにはいかない。

「途中まで、ご一緒してもよろしいですか？」

椎に極上の笑みを向け、了承の言葉を求める。
その笑みに椎は頬を染め、

「はい」

了承の言葉を返した。

瀬は椎の様子に満足し、椎の横に並んで歩き出した。中庭に着くまで他愛無い話を交わした。この数日の不機嫌さは消え、すれ違う人々が余りの違いに目を疑うほどであったという。

「それでは、ここで失礼します」

中庭の前に着き、椎はお辞儀をし、瀬から離れようとした。

「椎？遅かったわね」

「——杏さま!？」

椎が振り向いた先には美貌の王女、杏が立っていた。

「心配になって、迎えに来ちゃったわ」

杏はにつこり笑いながら椎に言った。

椎の手を取り、

「さあ、行きましょう」

中庭へと足を向ける。

ちなみに、瀬を完全に無視している。そのことに瀬の周りの空気は
どんどん冷えていく。

「あ、ちょっと待ってください」

椎は杏を止め、瀬へと向き合った。

「どうした？」

冷えた空気を一瞬で霧散し、瀬は椎へ問う。

もちろん、瀬も杏の存在を無視して。

椎はワゴンから包みを手に取り、瀬へと渡した。

「これ、後で渡そうと思っていたんですけど…」

渡された包みはお菓子のようだった。

「私の手作りなので、口に合うかわからないんですけど…よかった
ら召し上がってください」

椎ははにかみながら、そんなことを言う。

——連れ去りたい…

そんなことを思いながらも、表面には出さず、

「ありがとう。」

椎に蕩けるような笑みを向けて、礼を言う。

一転、杏には冷めた笑みを浮かべ、

「では、失礼します…杏王女」

言葉を返した。態度は王女に対するものではない。分かっているが、その態度を改めるつもりもなかった。

「…ええ」

杏も瀬にようやく目を向けた。その目はどこか冷たく、険しい。

椎は二人の間に流れる不穏な空気に気付き、

「どうかしましたか？」

恐る恐る二人に声をかけた。

「「別に？」」

二人の言葉が被った。

そのことに二人は睨み合う。

「でも…」

椎が困惑したように二人を仰ぎ見た。

「別になんでもない。そろそろ、休憩も終わりか。…たまには顔を見せにきて？」

椎の頬に触れながら、最後は椎だけに聞こえるように耳元で囁いた。

椎は真つ赤に頬を染め、瀬を凝視した。

その様子に満足して、瀬は中庭を後にした。
向かった先は訓練場。

椎に会えた事でだいぶ、気分は向上したが、天敵にも遭遇してしま
った。

その苛立ちを隊員たちへの稽古で晴らそうと思った。

華街の占者（9）（後書き）

そして、ふたたび訓練場は地獄絵図と化したわけです。

華街の占者（10）

露は物思いに耽っていた。

近頃、城内が騒がしい。

隣国の姫君の滞在から毎日、何かしらの騒ぎが起きている気がする。もつとも、原因のほとんどに瀬が関わっているのが実情だった。主に訓練での扱きしこという名の八つ当たりが挙げられる。今では奴の周りはツンドラ地帯。侍従や侍女は近づくことさえ出来ない。その結果、各方面からクレームやら嘆願が引つ切り無しに舞い込んでくる。

執務室の机の上に溜まり続ける書類——の大半を占める嘆願書に頭痛を覚えた。

——俺にどうしろと…？

露はそもそもの原因となった隣国、茜の国王からの書状を思い浮かべた。

茜国は滝国の南に位置する。

国土は滝国と比べるとさほど大きくはないが、鉱物といった資源が豊富な滝国に対し、加工や細工技術が優れた茜国とは良い関係が続いていた。

そんな中、茜国の第三王女の滞在が決まった。

茜国王には四人の王女がいるのみで世継ぎとなる王子はいない。しかも、この四人の王女は正妃の子ではなく、側妃の子であった。

おそらく、第一王女の夫となる人物が王位を継ぐのだろう。

そう、思っていたのだが。

判断するにはまだ早いかもしれない。

茜国王の書状には気になることが書かれていた。

「——どうして、こう厄介事ばかり舞い込むんだが…」

瀬についての嘆願書を読みながら、ぼやいた。

正直、嘆願書を読む意味はあるのだろうか。瀬の不機嫌はまだ続く。少なくとも王女が帰国し、椎が王女の傍付きの役目を終えない限りは終わらない。

つまりは嘆願してもきりがない訳で——

「嘆願書…放置してもいいよな」

「何を仰いますか」

小さく呟いた言葉を聞かれたらしい。

執務室に音もなく入ってきた少年が呆れた声で返事をした。

「していいはずだ。それより、一言声をかけてから入室しろ、あお藍」
「それは失礼しました。——それより」

藍は表面上はにこやかに装いながら、書類の束を机の上に置いた。

「——これは…？」

——嫌な予感がひしひしと…

「新たな嘆願書です」

侍従兼護衛である少年、藍は満面の笑みで返答した。

——頭痛がしてきた…

露は新たな嘆願書の山を見て、ため息を零した。

華街の占者（10）（後書き）

王様は苦勞性。

華街の占者（11）

——もう、1ヶ月になるんだな

椎は客室を片付けながら、ぼんやりと思った。
杏の侍女として出向することになって1カ月。椎にとっても、楽しい職場だった。

それなのに。

楽しいと思っているのも本当。
だけれど、淋しいと訴えるココロ。

王女付きとなつて1ヶ月。

それは露と瀬の傍を離れて一月になるひとつきということ。

こんなに二人の傍そばから離れたのは初めてだった。彼らの傍がわたしにとって安心できる場所だったから。

だからだろうか。

楽しいはずなのに、何かが物足りない。

不安定なココロを持て余し、ため息をつく。
こんなココロ、持つてはいけない。

『——彼らの役に立ちたい』

あの時心に決めたこと。

——でも、今のわたしは彼らの役に立てているのだろうか？

今のわたしはしがない侍女。彼らの傍にあるには、あまりにも不十分な身分であるのは分かっていた。

でも、彼らが変わらずにいてくれたから。

だから、甘えてた。

こうして、彼らの傍から離れてみて、一月前ひとつきの自分がどんなに別待遇であつたかに気付いた。

本当だつたら、傍にいることすらできないはず。

——どうしたら、彼らの傍にすることが許されるのだろうか？

悩んでも、相応ふさわしい答えは出てこない。

でも、答が出ない限り、彼らの傍には戻れない。

再び、ため息をつく。頭を左右に振りかぶり、沈む思考を追い払う。

「今は杏さまに尽くすのみよね」

思いを新たにし、部屋の片づけへと戻った。

——ボタンツ

「椎——!!」

「杏さま？」

杏は部屋の扉を乱暴に開け閉めし、椎に抱き付いてきた。

椎はそのとき、手に雑巾を持っていたため抱き返すことも離れることもできない。

「——あの男」

「えっと…杏さま？」

なにやら誰かに対し、怒っている様子。しばらく抱きついたまま、その誰かに対し怒りの言葉を呟いていたが、気がすんだのか椎から離れる。

「ただいま、椎。いきなり抱きついてごめんなさいね。ちょっと嫌なことがあってね…」

そう、言いながらも『嫌なこと』と言ったとき、杏の目に剣呑な光が宿っていた。

「いえ、気になさらないでください」

杏のただならぬ空気に怯えつつも、にこやかに返事を返した。

「ほんとうにごめんなさいね。そういえば、もう少ししたら建国祭があるんですってね」

杏はソファに腰掛け、椎は杏のためにお茶を用意し始めた。
お茶を用意しながら、杏の疑問に答える。

「そういえば、あと2週間したら建国祭ですね。城下ではいろいろな催しが開かれるんですよ」

「楽しみね」

杏は淹れてもらったお茶を飲みながら、にんまりと笑った。
その笑みは子供が悪戯を考えたときのそれに似ていて。

椎は嫌な予感を覚えたのだった。

華街の占者（12）

今、この時期に隣国へと赴いたのは賭けだった。
ごく僅かの側近たちだけを連れ、この国を訪問した。表向きは友好のため。けれども、本当の目的は唯一つ。

己の望みを叶えるため。

そのために自身の未来を差し出してもかまわない。
あの日から、そのためだけに生きてきたのだから。すべてはあの人のために――

さあ、舞台は整った。

建国祭。

年に一度、国最大の祭りは春の訪れを告げる国花『フィジク』の開
花から一月後と決まっていた。
ひとつき

国花『フィジク』はこの国特有の花であり、春になると一斉に開花
する。そのため、春を告げる花と呼ばれていた。

建国祭は『フィジク』の開花一ヶ月後としたのは、建国が戦乱の最

中だったため『いつ』だったのか定かではないこと、戦乱の世が終わったのが冬の終わりだったことに由来する。

『フィジク』の花は二月ほど咲き誇り、そして一斉に散る。

建国祭は花の盛りの時期に行われるため、人々は建国祭を『花祭り』とも呼んでいた。

建国祭は三日間に渡って行われる。

本祭とされるのは三日目。三日目には王城が公開され、祭の最後には王城のテラスから王が祭の終わりを告げる。

そのため、テラス前の広場は人で埋め尽くされる。

去年までであれば、テラスに続く部屋でその様子を見ていた。では、今年はどこで見ることになるのだろうか。

ああ、でもその前に。

この状況をどうしたらいいだろう。

椎は後悔していた。

周りを見渡すと、祭に浮かれた人々。真横を見ると、楽しそうな杏さま。

——どうして、止められなかったのだろう。

でも、どんな言葉でも王女は止められなかった気がする。

せめてと、同行だけはさせてもらうことにしたけれど、内心は焦りと後悔でいっぱいだった。

いくら、王女の護衛である騎士が二人同行しているとはいえ、一国の王女に何かあったらと思うと心配の種は尽きない。

どうにかして、早々と城に戻るようにならないと——

建国祭三日目。

城内が公開されるということは、反対に城外へ出ることも容易であるということ。

滝国の客人であるはずの茜国の王女、杏は周りの目を掻い潜り、祭に賑わう城下へと足を運んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6312q/>

華街の占者

2011年6月7日06時30分発行